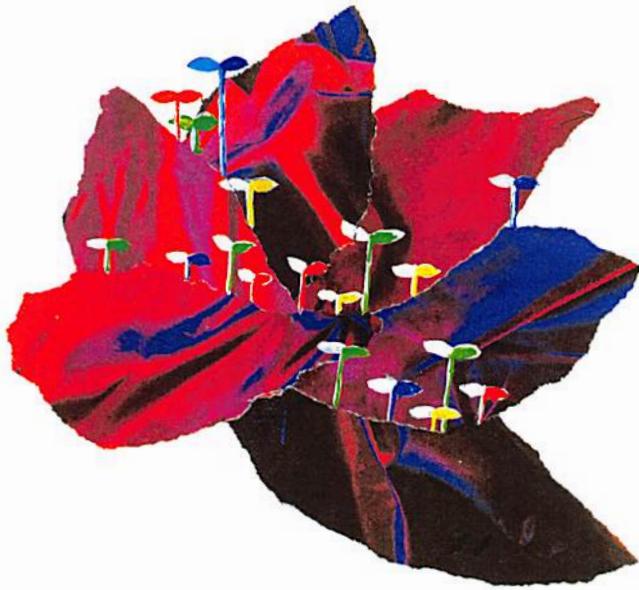


地中海

MARE MEDITERRANEUM

2022.10



創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の癡惑として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しました北上した、すべての未開などを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ビカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みんなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

一〇二三年十月号（通巻七七三号）

◇今月の二十首詠……似鳥行——「原爆の子」より 石田明彦 2

■作品[A]

篠原まり子・柴田登志恵他

齊藤順子他

首藤悦子他

鈴木幸子他

山岸時子他

中村恭子・中村はるみ他

重松鶯子・八巻信隆

田土成彦

香川進と井沢淳

久我田鶴子

香川進の生きものの歌

48

15

14

34

19

242

46

山本 孟 45

高尾恭子 64

酒井 牧・根岸 亮 66

永田進一・藤田しん子 65

滝田靖子 65

玉井綾子 65

久我田鶴子 18

1

■遊覧寄港〈山歩きの思い出・敦盛草との出会い〉 神戸良三 44

送風塔

■歌壇月旦

ウクライナ侵攻を詠む

■八月号作品批評

A……もとむらしげと・小原香里

B……酒井 牧・根岸 亮

C……滝田靖子

オリーブ集……玉井綾子

オリーブ集……玉井綾子

オリーブ集……玉井綾子

オリーブ集……玉井綾子

最近の歌誌より

〔編集部〕

「地中海」の五十年前（一九七一—一九七五年） 久我田鶴子 34

報告・岩里周英歌集『北畠八間』を読む会 潮田千代 88

私と短歌との出会い (242) 水本セツヨ 19

クリップ……63 神田通信……表3

にのしま
似島行 —「原爆の子」より
⁽¹⁾

石田 明彦

一九四七年広島市生まれ。
二〇一一年「地中海」入会。
岡山支社所属。

被爆者をのせてかよいし大発艇⁽³⁾とおなじ航路をわれはたどりぬ

迅速にマルレあやつり救護せしは少年兵とききておどろく
⁽⁴⁾

(1) 広島の沖合3キロに位置する。被爆者一万人がこの島で治療を受けた。

燃える街にひとりまよえる小学生を誰が手が艇にはこびいれしか

島山を小富士とよべりあまたなる死者を見てきしたおやけき峯

(2) 長田新編「原爆の子」岩波文庫。

「おべんとう」あたえて死にし少女あり救護所へゆく艇の隅にて

(3) 旧陸軍の上陸用舟艇。大発動艇。

「おべんとう」身に受けとりし少女あり生命をつなぎ手記を残せる

(4) モーターボートの特攻兵器。

わずかなるコーリヤン^{*}飯と野菜とがおさなき手からわたされにけり

(5) 帰還した兵士の検疫所があり、原爆被災時には臨時の救護所となつた。

日ごろよりひとおもいやる少女ならん死のきわにあって糧あたえしは

(6) 軍馬の検疫がおこなわれおり、馬の焼却炉で遺体も荼毘にふされた。

(7) 平和公園にある原爆供養塔。似島でみつかった遺骨はここに改葬された。

身体にて核よりまもりし「おべんとう」を今の世ならば汚染米という

検疫所の桟橋あとの風にふかれ渡りえざりし被爆者おもう⁽⁵⁾

怒りもてひとりの子供を想像せよいとけなきもの聖女にあらず

なげあげられ少女はたかく空を翔びゆるらかに落つ遺体の山に

柵のむこう死馬も遺体もやきしとう馬匹焼却炉が木陰にみゆる⁽⁶⁾

にんげんと馬の骨とをうめし地の公園にさす夏のひかりは

馬とあそぶ少女のすがたをすじ雲は編んでゆくなり遺構の島に

島人の半世紀余のうつたえに掘りかえされたる千体の遺骨

慰靈碑にあふるるばかりの花さきぬ過疎進みたる島人つくる

いま少女は土まんじゅうの七万の引き取り手なき遺骨のひとりか⁽⁷⁾

戦争の痕なにもなき海ひかる 入港の汽笛 街へかえらん

きいえぐる「おべんとう」あげますの小さきこえ暮れゆく街にたれかふりむく

* 岩波書店文庫編集部に許可を頂いたので手記の一部を掲出する（石田）。

「原爆の子」上巻—中学校三年（当時小学校三年）田中清子さんの手記より。

—お母さんのすわっている前に、私と同じ年くらいの女の子がいました。その女の子は、体中にやけどや、けがをしていて、血がながれていました。苦しそうに母親の名ばかり呼んでいましたが、とつぜん私の母に、「おばさんの子供、ここにいるの?」とたずねました。その子供は、もう目が見えなくなっていたのです。お母さんは、「おりますよ」と返事をしました。すると、その子供は「おばさん、これおばさんの子供にあげて」と言つて、何かを出しました。それはおべんとうでした。—

作品 A

篠原まり子

猛暑

・羊

鈴木結志

人新世

・福

父母の知らぬ齡をひとりして密と生きるも辛き夏あり
夏の朝電力体力ぎりぎりの日本晴れは恐ろしきもの
人に会う日も無きまことにこの夏は誰彼なしに音信不通
元首相悼むまにまに投票場しばし佇む朝顔の花花
雲間より現れ出すスーパーームーン世を悲しむか宵の月光
身の内に余波は留まる熱中症有めて涼し部屋を離れず
ペランダのトマトが熱い熱中症同病憐れ浸す冷水

柴田登志恵

蝸牛

・天

関根栄子

極り手

・埼

茶道から暮らしの教えかつ薬膳の食に至れる知識を学ぶ
「道の記」のうたにこだわる阿仏尼の一途をしのぶ十六夜日記
二氣の理を詩上におきてわがこころ五七五文化に足らいておりぬ
「勤勉は幸福の母」セルバンテスの言葉信じて筆ひたにとる
世の渦中「人新世」如何にとく課題を負いて生きる永存
米初の遺伝子改変アタの腎臓臍死者の機能復帰の移植公表
人間の意識転送禁断の「動物乗り」に興味が走る

背よりも高き笠蓑雨しげく稻光爆する山を下りぬ
閉ぢられしヒュッテのテラスに雷雨から逃れし幾人犬も混じりぬ
蝸牛電雨のあととの草蔭を背に殻負ひまた歩み初む
蝸牛三センチほどの殻粗く握りしめなば容易く壊れむ
艶のなき殻に潜みつつ蝸牛じわじわ退きゆく戰闘地帯
難民のバッグの大きささまざまに家出づる前夜悩み荷ならむ
てのひらより大きくななるの芙蓉咲き仮寝の猫の尻尾揺れざり

関根和美 虫干し

・埼

佐藤道子 大地

・甲

独身の弟は今さびしからん妹らスマホに孫を見せあう
思いなば夏の葬りの多かりき喪服あれこれ虫干しがせり
嫁入りに持ち来し始のこの喪服母の葬りにしつけほどきぬ
生涯にただ一度の入院に逝きたる母の骨ふとぶとし
朝毎に煮干したっぷりだしをとる祖母母なりきわれも従う
物に囲まれ物に使われと揶揄せしを今にわかると母のひとこと
「てんさぐの花」をはじめて聴きたるは邑子の歌声松島の夜

坂出直美 受難

・天

窓の外は夏の光が溢れてた幼子は檻に入れられ死んだ
部屋の中小さな檻に入れられて幼子は渴き死んでしまった
ただできえ滅る子どもたち生まれてもコインロッカーに捨てられていく
都會ではコインパークリングの片隅に生まれたばかりの子は捨てられた
田舎では烟の隅に埋められて生まれたばかりの子は捨てられた
子どもらよ無事に生まれて生きてゆけ美しい國このニッポンで
端錆もいと機嫌よく羽根ひろぐ三年ぶりの山鉾巡行

坂出裕子 雀

・洛

子の孫の写真机上に並べ置き長きコロナの刻を過ごせる

電話して声が聞ければそこにあるやうな氣もする気もするけれど
何気なく窓を開くればいつせいに雀飛び立つ砂浴びをせし
砂浴びをしてる雀に気が付かず窓を開けたのごめんなさいね
体温を超ゆる熱暑の続く日々 未踏の世界老いて今更
人通りすくなき道にしめりたるマスクを外すほつと一息
歌のあるしあはせ思ふやるせなく閉ぢ込めらるるコロナ禍の日に

5

コロナ禍におびえて旅せぬ妹よ浅間山麓この夏さみし
日暮れより朝鳴ける山の中街住み長きをときに淋しむ
森の中森の木立の木洩れ日の清らかなるに目を見張り居り
花の香のふとただよへる森の中眞白き百合の一叢に会ふ
街住みの便利便利に馴じみ来て土の豊かさ忘れて暮らす
コロナ禍を知らずに逝きし夫のこと幸ひなりしとこの頃思ふ
二年も会へずに逝く人残る人いつまでも淋しかるらむ

高尾恭子 初益

・大

仁左衛門の休演づく梅雨明けを薄く灯れりグリコの看板
初蝉はいまだ聞かざる七月の耳のうしろがざわついている
かたわらにあなたをさがす夕暮れを「精靈流し」の歌声しみる
夏の夜をくりかえし聴くさだまさし瘦せっぽちの遠花火なり
余所事にあらぬ盂蘭盆やつてくる強炭酸の透ける一聲
焼肉の晩餐なりし三人の位置は変わらず子とわれの卓
母はどうに忘れたのかしら泣きながら吾の両手をつつみし九月

高津砂千子 テッペン

・風

腰椎の痛みせめても花にせん 心に咲かす薔薇ピンク色
紫陽花のかけにひそみて鬼ごっこせし日のありき露に濡れつつ
天上の父母にみやげがまたひとつ骨折というはじめての閑
経験は財産なりき車イスの扱い馴れてはずむよ胸が
楽爪といいうしるしかな入院しわが爪伸びてゆくがはやかり
いつしかにかたち変えしや白雲は自由自在を病窓に描く
喜寿近くまさかの坂のテッペンに立ちて思いぬ過去また未来

滝田 靖子 母

・新

咲いて散り散つては咲きて十一の百合の亡骸根方に朽ちる
廃棄するつもりの古着いつの間に母の日常の服になつてゐる
母の不要とわたしの不要を交換し断捨離いつたままで続く
戦利品のやうに掲げて持つてくる新しい鎌を手にして母は
新しい鎌を右手に握りしめ夏草繁る庭に出陣
蚊が蚊がと敵の襲来告げながらたつた五分で退却してゐる
母としか話さぬ日日を積み重ね母より先に呆けてしまふ

田 土 成 彦

通り雨

・宙

産土の祭り囃子の聞こえ来て夕べ小雨の通りゆくらし
異国の丘唄ひるし傷痍軍人も見ずなりし昭和四十年代
アセチレンガスの炎と雜踏と消え失せてはや幾十年か
地車の囃子が近づき遠ざかる後ろ髪なき刻の彼方へ
呆けることなく逝きし母五十五の命一杯生きられたやら
現世なればベットボトルを挺げてゐむ百濟觀音のその細き指
勝手とは言へど鶴の鳴き立てる午前五時朝のしらむ一時

田 土 才 恵

普峯寺

・宙

蓮の葉の丸葉にぼつり降りそめて紫陽花寺の境内濡らす
山あいの善峯寺に降る雨の紫陽花濡らすその蒼深め
晴れやらぬ霧に見えるもどかしさ言いつつ戻る寺の坂道
夫と子と孫娘とゆく坂道に霧はれゆけば紫陽花の虹

遊龍松太き緑に山肌を龍の様して寺守り継ぐ

桂昌院手植えの松といういわれ藤くさまに緑あらたし
キッテンに土におい立つ新じやかの到来文月わが生れし月

玉井綾子 第七波

・第七波

・羊

日常はコロナ禍中でも進みおり夫に布巾を渡し出掛ける
家族内家事分担は変化せずコロナウイルスを是認も出来ぬ
コロナ禍に夫の家の家の分担はコンマの微増 ウイルスが嘲笑う
仕事終え真っ先に今日の感染者数を調べる今年の夏も
ライバル社の感染者数をチェックして多さに安堵する吾を危惧す
会食の約束をしてやめない?と言いく出す人がいなければやる
安倍首相狙撃にまたもACのコマーシャル増え居間に身構える

中島央子 白桃

・森

爪音を床にひびかせ馴寄りくる黒き瞳に今日が始まる
娘より心づくしの新玉惹きざむ手元に匂すきとほる
狭まりし視点・動線ごちなき身体をひとときヨーガにほぐす
夕風の吹きそむる土手に曳く人も曳かるる犬もかなりのお歳
戦争のニュースは御免りて大相撲中継呆と見てゐる
マリウボリに空襲のサイレン響りわたる壁にテレビ消したり
卓に置く白桃一顆に生氣満ち会へぬここに一灯点す

永塚節子 夏

・夏

ゆるやかに開き初めるゆうすげを身じろぎもせで並び待ちいし
新盆の庭に咲きつぐゆうすげの黄の色さみし澄みとおるゆえ
ゆうすげの咲くを待ちいし夕つ方時は帰らず人は帰らず
さえぎるもの一つだに無き海原を白き釣り船立つる白波
ふかぶかと緑また緑単線の電車の音に耳かたむける
降りる人乗る人もなき無人駅に色々見えとあじさいの花
単線の電車にゆられいつの日か始発駅より終着駅まで

仲西正子

紅ひもの花

・沖

おもむろにやわらかな肌さぐりあて吸い付ける蚊の様を見ており
しましまに飾れる蚊なり後脚一本あげて吸い付く流儀
炎天にふつさりと咲く紅ひもの花ぬれもせずひたすらにあり
長ながと紅ひもの花咲き盛り庭の片辺に呼び止めくれる
くるくると巻きて掌に置く紅ひもの花の妙なり出会いて楽し
土砂降りに折れる枝もつ紅ひもの木の花ながき命を灯す
パパイヤの大葉萎ぶる炎天に糸瓜はひらりと黄花を咲かす

白子れい

蟬声

・洛

陽のいまだ昇らぬ路にジャンジャンと頭上より蟬の声降りきたる
ジャンジャンと蝶迎えくる朝のみち汗じつとりとにじみてきたり
いつしかに鶯の姿の消え失せて蟬声われの背を押しくる
小雀の三十羽余の集まりて朝の草原に餌をあさりおり
雀さん沢山よりて何あさる 一羽とのべば皆一齊に

西山に沈む夕陽眺めつ歩む疏水べり蟬声弱し
樹々の青・道べの草のさみどりに誘わる歩み今日も暮れゆく

ばばりようこ

まみれまみれぬ

・鹿

静寂を曳きいて点滅夜もすがらこの季とばかりのホタルの饒舌
逝きし人らの交信ともし佇みて乱舞のなかにまみれまみれぬ
指滑せて又もや指輪落としたる蝶のかたちの汝の行方は

放たれて野に遊びしか否ダッタンの海峡に汝挑みるやも
風立ちぬ 朝の庭の残り花いる蒼ざめてうなだれにけり
日差し強く庭の手水をぬるませりメダカを案じオロオロの日々
傘かけてやりましたこの猛き夏 ふたりと五匹のり越えましょく

浜谷久子

スイッチ

・地

侵攻は機械仕掛けの非道かと入るスイッチ入ったままに
手短な会話手近な畠暮らし明けぬコロナ期侵攻の地鳴り
オリーブの実の真みどりが葉とともに揺れて迎える真夏の日差し
夏花の咲き続ける庭あふれる陽暮れて木種のぼつりと落ちる
六片を咲き誇らせたカサブランカ花の終わりは来夏へつづく
花びらの中に咲かせる花かんむり百日草の華やぐ真夏
辣莢を漬けてひと月そろそろと味たしかめる甘酢がからむ

檜垣美保子

夏雲

・昂

油蟬鳴く日盛りは耐えがたくななか溶けぬ塩飴を噛む
蟬の声不意に止むとき入れかわるおかえりなさい左の耳鳴り
高きより低きへ流れ溜まりたる路肩の砂に根を張る露草
わきあがる夏雲の峰をめざしたき衝動のあり自転車をこぐ
残酷な歴史は遠く教皇の白きズケットにはが微笑む
微熱あり腰臙として座すははの薄暗がりにかかる白桃
窓ぎわにベッドを寄せてわが髪に両手を敷きてわが夜を見ん

福田庸子

白あぢさる

・今

厳かに村の社を守りゐる白あぢさるの光まぶしき
人去りて家のみ残る集落に白さがともるあぢさるの花

水無月に紅濃く咲けりコスモスのこぼれ種ほど強く生く性
己が手にて字を書く歴史消しゆくを人類の進歩とは諾へぬなり
縦書きの流れに沿へる眼の位置を日本人なら会得してゐる
爆撃に空の穢れは層を成し地球すべてを壊してゆけり
大洪水山火事地球の叫び声人間界は爆撃続く

藤田美智子 百歳

・新

牧雄彦 清滝

・大

まもなく百になると自らの歳を言ふ娘のわれを忘れるとも
水たまりに映れる影は立ちむたる樹よりもたしかな重量をもつ
きゆんきゆんと靴を鳴らして幼子の駆けゆく先に搖るるブランコ
くちなしの花びら少しづつ痛みたり香を放ちたる中の疲れに
しじふから雀ムクドリ鳴きぬしが晴太がらすの声に途切れぬ
混雜のなかの旅行者を批難せりほんたうは旅に出たきこころに
故郷への思ひの深さでは測れない帰還か否かを決めさせるもの

藤森巳行 みすゞ飴&彩果の宝石

・銀

食べ比べ信濃の鉱葉みすゞ飴埼玉銘菓彩果の宝石

ほんのりと口に広がる果汁味みすゞ飴は昔と変はらず

国産の果汁を固めたみすゞ飴幼き頃の高級おやつ

みすゞ飴祖母が買ひ置き孫たちに与へしおやつは二つか三つ

甘いもの乏しき我の少年期憧れの菓子みすゞ飴あり

濃厚な果実の味が溶けてゆく彩果の宝石埼玉銘菓

それぞれが果実の形に彩られ彩果の宝石箱に輝く

船田清子 変りゆく

・天

くちなしも夕顔も見ず幾年や夏の風情は蒸す空気のみ

近隣の田圃はなべて宅地化し、オケラも蛙も鳴かぬ水無月

十三夜と思ひ見上ぐる中天の雲間に月の輝きつよし

君や浴びし?雲なき天界に放たるるスーパーーンの金の光矢を

悲しやなスーパーーンも金の矢も地上は雲のシャッターの下

朝六時蟬一齊に鳴き出だし今ぞとばかりアピールせはし

コロナ禍に変りゆく世へ追ひつけぬ年寄りの足よろめくばかり

清滝は小雨にけぶりゆく人の影なくしづかな昼夜下りなり
清滝の川の流れの激しくて涙を覆へるみどりがふるふ
愛宕山霧雨けぶる杉木立縋ひて静かに神はくだり来
川に沿ひ並ぶ民家は年を経て霧雨のなか人の気配せず
清滝の瀬の音高きこの時を虫はいづくにひそみてをらむ
集落に雨降りやます道に沿ひひつそりと咲くクチナシの花
音もなく霧雨やまぬ清滝ゆ遠きかの地で人は殺し合ふ

松浦楨子 「細雪」

・羊

港の見える丘公園より見はるかす船の往来も平和の色に

日本人よりも日本人らしき人ドナルド・キーン展に通いきたりぬ
ドナルド・キーン誕生百年の記念展期間のひと日「細雪」に逢う

キーン氏のもつとも愛せし谷崎の「細雪」うるわしき四人の姉妹
ある時代終わりの時にゆき合いしかなしみはあり階級越えて

新しき時代に抗すこいさんの高峰秀子贈するどく

戦後すぐの映画となりし「細雪」演じし美女の四人いま」
く

松瀬トヨ子 黙食

・沖

ケア室に黙食の昼餉さくさくとコロッケを食むコロナ三年目

換気します開け放す窓カレーの香と生温き風どと吹き入る

リュック背に介護車に乗る旅の氣で海沿いをゆく真っ青な空

中秋の月光深く土に染み米軍基地さえ澄みて静まる

作業者のままの息子に押されつつ雨の晴れ間を投票に行く

杖つき歩幅小さきわれの前長身の男の白スニーカー

高校の自転車置き場それぞのミラーに輝く白き太陽

松 永 智 子 蟬

・嵐

三 好 聖 三

夏水仙

・伊

玄関の間に夜毎きてともる螢火ひとつ見るとなく見る
闇入の螢火叩き落としたるひとつ螢火のち自在なり
待つものあらず日の暮れふりむけばキッチャンタオルにともる螢火
落とされし螢火いづくにひそむらむ玄関はただ音のなき間
人の声物の音のいまだなく間にともる螢火ひとつ
音のなきあかとき間に青白くただひとつなる大き螢火
キッチャンのタオルに蒼くともしたる螢火ひとつ来ずなりし間

三 浦 好 博 テント持参

・鈴

電話機に向かひ高らかに吟するは君への詩なり「胡隠君を訪ぬ」
生きてゐる我らの姿見に来る東京の子らはテント持参に
丘畑は玉蜀黍の丈高し雉子と出会いひ頭と共に吃驚
公園の草刈り休憩樹の下にティゴの花の脳天を打つ
政 に無関心のひとに憤る多様性をば當言ふ我が
亡き父よ汝が子は十も越えて生く公園草刈り奉仕などして
正論の通る世来るか何世代先か地球はその時あるか

宮 本 靖 彦

二度梅雨

・凌

蟬の声聞かぬに梅雨明け十日経ぬ老いに厳しき酷暑の予感
初蟬の早やジジと哭きころがれり世代繼承無事済みたるや
草抜きの手許に飛び出す子鈴虫親と同じの姿形に
二度梅雨の音だけだし湿り気は心の奥に微生やすらむ
再来の梅雨終焉か東空に入道雲湧き西日に輝く
談笑の刻かへり来る壁に貼る吟行会の旧き写真に
あの一打脳にしまひ留めおく四人ゲームのべつたこなれど

かなへびがひらひらわたる壁のうえ緑青色の葛でにぎわう
ホライゾンあきらかとなるあかときを南下する船次々走る
たけたかく夏水仙はひらきたり生成にあわく朱を添えつ
歌はもう止めたらどうかという声に作ってねえさと答えておいた
そうめんに花丸きゅうりを添えて出す13時05分の昼餉
エアコンをドライにセットして読める『人を殺すということ』まずは
あきあかね廢の上に止まりたり直ぐなる胡瓜採りつぐあいま
御代田澄江 秘湯は招く

・茨

首都圈ネットよいお湯見つけ放映の月居温泉秘湯に惹かる
ばつんと一軒家登り登り辿り着けば岩より落つる源泉熱し
清流久慈川鮎釣り人を散見し辿りし秘湯遠来人數多
追憶とふ木目込人形吾造り年経れば着物も柄も色褪す
長男に連獅子次男に牛若丸と弁慶長女に内裏姫今に飾れる
援助とふ美美しき言葉連ねつつ政府は未来に重き借財
般若心經写経なす間も〈無〉になれず怒り湧き来ぬロシアの侵攻

茂 木 畾

政子石

・埼

かまくらや一度は見たい見ておきたい政子石なるパワースポット
かまくらや八幡宮の境内に鎮座するとふその政子石
まこまことするよりうろつき探すより案内係に一時の恥
政子石?源氏池の弁財天にありますと立ちて指差し親切なりき
政子石カメラに撮ればそのあとは大河ドラマ館にもけふは用なし
肩だしのワンビに全身文身の肌みよがしの若き女に会ふ
ヒゴタイの芽を出し徐々に葉の伸びも熟著の畑に瀕死に近し

もとむらしげと

燕の巣

・そ

母逝きし生家の軒に燕の巣去年と変わらぬ夏が又来る
悲しみは錘をさげて沈みくる母の夢を見る夜を重ねて
わが皮膚に吸いつきほのぼのしたる蚊を叩き潰しぬ苦しまぬよう
店窓に来るかもしれない一瞬に叩き潰されし蚊のことく死は
密やかに生きて死にたる一生を望みたりき二十歳の頃は
失いし記憶は二度と戻らざる今日なくしたる記憶もあらむ
カーテンの下から尻尾のみ見えて明けゆく庭を眺めいるらし

山 下 雅 子

墓 参

・習

東塔のシーンに夫の声聞けりひとひらの空と誦しし若き日
コロナ禍を気にしながらも菩提寺へアガバンサスのま盛りに会う
年代の石肌粗き墓の前夢にも逢わぬ父 母 夫よ
嬰鑑たる六十歳に逝きし父老爺の姿未だ描けず
ひさびさの墓前にしのぶ生き仏の大事を言いし母の口ぐせ
蝉鳴かず蚊を見ぬ酷暑七月のサル痘感染に鳥肌の立つ
娘よりグリーンカレーの届くといういそいそと米を研ぎ始めたり

山 野 幸 司

雲

・沖

夏雲のあのなつかしき岩岐の島娘らと遊びし浜の白波
くじら雲あれに乘りたい子らの言う小学一年国語読本
黒々と日焼けの娘らの日の光水へともぐるスッポンの背
背に負い雲渡り行く天の果て夕光を追う鳥の飛び立つ
夏草刈り進む畦音高くエンジンかなし孤独を深む
平凡な日常をのむ夏休みプールに遊ぶ家族らの群れ
時折りに蝶の舞いいるプールにもドラマを造る子と鬼こっこ

山 本 孟

小さな大書店

・大

店内は思想、学術、文学など「小さな大書店」閉店となる
わが生きる糧なる「小さな大書店」閉店となる今の日本
京の街寺町歩けば三月書房 閉店 京へ行く用なくなつた
母校誌の三誌ます見る追悼欄同期の名に会う制服姿
向こう三軒両隣死語となつたる都市生活孤立に慣れて階より見下ろす
高層に住めば向こうは青空 隣に住むは三人目の他人
遠景の山まで雲なくもやと町はハッ！却然ごもつてゐる

養 学 登 志 子

祝

・凌

東廻斗みばえの椀の鐘懐暮思わず手合わすひとと日の合う
ころあいのつめたさの御酒そそがる切子の藍のきらら祝盃
鶴の舞う黄金縁取る器に端と湯引の鐘にはゆる紅はも
筈の葉のかおりほどけば赤飯のほろと出でくる祝いごころの
満ちたりし和みのかたえ一口の心づくしは白味噌アイス
初蝉はニイニイ蝉の苦なるをこの頃なぜかいきなり熊蝉
紫陽花の濃みどりの葉にかまきりの生まれたばかりざわざわ出て来ぬ

横 田 敏 子

庭

・福

雑草に覆われていし庭の面草むしられて地面がのぞく
狭き庭に南天、紫陽花、薔薇、椿込み合う木々は断捨離時か
伸びすぎて奔放な枝刈り込まれ黄楊、伽羅、紅葉すつきりと立つ
剪定の済みて空間生れし庭夕べの風がさやさや通る
明日の雨予報通りに降りてほし庭の木並べて雨を待ちおり
バラバラと音響かせて降り来たる待望の雨に生き返る庭
朝夕に日に幾たびも眺めいる緑の庭は吾の拠り所

吉永惟昭 本田良一 氏逝く

・熊

大浪美雪

木のボーズ

・森

卒然と君逝き給うくしゃくしやに朝刊一面に訃報が奔る
白道を希求の中井竹行師を一途に慕いし君の生きざま
若きより政治家だったナ 飲めざるに飲み友多く君を囲みぬ
与野党の裏も表も知り尽くし人懐っこさが君の持ち味
参議時の君は北方委員長歴史探りつ千島語りぬ
茫茫々と湧きくるおもい見てもいぬテレビ消せるは照の富士三敗
頸子娘参議再選ただ一筋このまま乗り切れ地中海青し

磯田ひさ子

桜

・森

糸咲きの朝顔をかし畠の先くれなむに染め二日めに咲く
細長き茎を伸ばせる鳥柄杓いい人ぶるのはもうやめにしよう
草刈りを終へたる背に毛虫をり驚きもせず払ふ吾かなし
打ち水に口をつけては移りゆくカラスアゲハよ汝も暑きか
厨辺に立つ一時の立ち難く楽になるやと木のボーズどる
植込みに羽の山がれる雛一羽石に頭をつけふるへてをりぬ
大空を羽博くことなく逝きし雛朝一番に深く埋めやる

奥田陽子

木槿白く

・羊

照りつける真日をさへぎり影を生む夏の桜の雄々しかりけり
枝分かれしたる桜の太りつ葉の密々と影を濃くして
香ければかくれやうなき身をさらす桜勇まし背き若武者
ひそかにもわれは誇りぬ泥くさき坂東武者のあらくれの裔
外国の香りに惹かれ蒸し器にプリン作りし小四の夏
コロナ禍に沈む日 nich 小四の孫の手作りプリンが届く
夏雲の湧きては崩る変異種のコロナはびこる日本列島

梅本武義

シーチンピン

・羊

純白のこころ捧げん思ひなれ木槿まさに大輪ひらく
寂寥は不意に来たらん大切な人喪いしひとり思え
翳りなく木槿は白くひらきたりはるかに人の生死を越えて
梅雨の日の土の匂いを踏みゆきて白詰草の季節と知るも
熊笹にふれて下れる路の先白詰草咲く広場ひらける
窓ひらきます眼に入れる花の白ふかき呼吸をなしたり今朝は
年年の炎暑のこころ洗われんみづめきたれり大き花の白

小野雅子

夕暮れ

・羊

椅子を直く木陰の風の心地よし八十路無理せず菜園に過ぐす
放棄田をもとにもどせば食糧の自給上がるを政策聞かず
山里へ世界の不穏配り行くバイク遠のきほとときす鳴く
戦争の正義は勝者が決めている加担をすれば勝たねばならず
荒らしたる山を整理し燃料に幼き頃の暮らしを思う
香港もおもねり上手を競い合い習近平が笑顔を見せる
キヤスティングポートを握る自信見せシーチンピンの傾げる微笑

ボルシチはウクライナ料理といふ「バラライカ」にて食べボルシチ
「てぶくろ」のお話 映画「ひまわり」を瓦礫の町に重ね悲しむ
姑たちの会話の端を思ひ出す貼る音葉のすき間が痛い
萎れずにボトリと落ちた蘭の花デミタスカップに一日かざる
作らるる影位置を変へ今日からは陽の当たらないゼラニウムの鉢
夕暮れの光とどきてキッキンに茄子の醡みゆらさき深く
招くやうにヒマラヤ杉の枝ゆらぎ梢は夕日に照らされながら

神田錦子 命消ゆ

・大

木村文子 雨

・羊

・羊

にこやかに演説中の人が消ゆテレビに映りし命いま消ゆ
政界にその名を刻み逝きし人演説さなかを凶弾に死す
思はざる慘劇胸に暑き日を投票に出づ足どり重く
理不尽に命絶たれし人を悼む声が届けりブーチンからも
迷ひつつワクチン接種受けし夜の腕の痛みは生きる証か
寝返りもままならぬ身を持って余し熟睡出来ぬ夜は明けそめぬ
四度目の副反応のきびしさにひと日むなしく床に臥したり

菊地栄子

三陸道

・湾

草刈十郎

風鈴

・世

若葉なす山間に人の住処あり人それぞれのしあわせ思う
新緑のやさしき色彩繰り広ぐ三陸道の行き摺りもよし
まだ若きりんご畠の白き花水き未來が待ち受けている
平らかなこの集落に垣根なしまばらな樹木が表札がわり
登り来て苦しき息に立ち止まる足許に実を結ぶカタクリ
道の辺の傾りにコゴミ桜の萌え細文の裔は摘み草をする
石楠花群生している二輪草レンゲツツジが山頂に燃ゆ

北山雪男

自嘲の譜

・伊

國井節子

水の器

・春

首吊りの規格に合はせ過ぎし日よSあらさればMを端折りて
嘘つきの鳥語いたぶる妻の網ロクデナシ語も別途逃さず
担当は掃除・洗濯・ゴミの処理 置いて戻く平和のために
洗濯はいまだ固執の二層式 日々の脱け殻縫れ絡むも
自助の国、行きつ戻りつ悶えつひとつ背中に貼るサロンバス
冷えびえの水注ぎをり潤滑酒もはや望めぬ胃の暗がりに
その父の推移変遷子は知らずまだ呆けなる繰り言と忌む

山をこえ煙のような雨がくるまもなく日暮れもう帰ろうか
ぱつぱつと降り出した雨たちまち豪雨となりぬ道路を叩く
落雷のニュースをテレビを見ておればなすきに遠雷轟く心地す
電力の不足する夏 雷の電気は風で集められるが
雷を捉えたテレビと窓の外 おなじ雷まなこのなかに
カーテンを閉ざした重い部屋のなか気象警報はひっきりなしに
一日を降りこめられて夜となる出番のなかった日傘よおやすみ

卒寿すぎ戻れざる過去あれこれと思ひつ自肅の日々過ごすなり
一条の風見逃さず風鈴の音の澄み渡りしみじみと聞く
いやなことしばし忘れむと甘く寝て苦く目覚むる星寝なりけり
政府より呼びかけられられし節電に扇の出番多くなるなり
高齢者の肌とて容赦せぬやぶ蚊朝一番の庭に刺さるる
たてがみを振り立て巨大な獅子躍る如き猛暑の次つぎに来し
日日酷暑続けばわれも夏帽子かぶれどさして用なき身なり
語り部の稗田の阿礼の記憶力にあやからむとて御墓をたづねる

河野繁子 意志

・雁

近藤芳仙

一本木公園

・信

真珠湾を奇襲し日本が戦争を始めし 小学二年の十二月
原爆の閃光に驚ききのこ雲仰ぎ佇む六年生の夏
八月の晴れて暑き日あつまりて玉音放送聞きし疎開児
まがことのめぐる地球に朝くれば色あざやかな朝顔ひらく
ねじ花の意志は強くて左巻き右巻きしかと咲き登る日々
遺伝子か意志か知らねど緩やかな螺旋階段のぼる一本
こまやかな螺旋をのぼる花の数かぞえて朝のこころ遊ばす

小林能子

国境

・羊

竹下妙子

過ぎ行き

・霧

藤沢の猫が夜な夜な戸塚宿かすめて「踊り場」へ往来自在
町おこしイベントなれば山峡のにぎはひ「国盗り網引き合戦」
年ごとに伸び縮みする国境「兵越峠」の網引き合戦
国境賭けての網引き遠州と信州とに三河の行司が立ちて
網引きに行司が立てど「戦争」に反則負けのルールすらなく
生きるためにウクライナから極東の日本に来しと哭くこゑを聴く
在留許可就労可能の一年にどうか日本語あきらめないで

近藤栄昭

鉄人間

・虹

紅葉の沢の楓を抜けて来し風が心に吹き溜りゐる
われと吾が虚実のあはひ透かし視る切子グラスの澄みたる深み
頑張ると誓ひつつ痛む足腰のリハビリ怠惰なるを恐るる
雨ながら日は暮れそめてリハビリに行けぬひと日は漆黒の夜
サルスベリ紅・白の花咲き競ふ 骨の上で吾は滑れる
束として二十年間が過ぎ去りぬ吾の思ひを言葉になせば
幼な日にわれの後追ふ息子の背を探しつつ歩く雜踏の中

浜本 芙美

友

・夢

落ち椿地に還りゆくを踏んでゆくなお生ありて息の聞こえる
この足は欺きの足か花を踏む白詰草の野原一面
駅近く継ぎ目の線路跳ねる音人は運ばれ運ぶ電車に
赤城山今日は片手で動かせそう二の腕のコブ少し大きい
街灯にブランコの鎖光りいて握る手のひら夜に濡れいる
止まってと思うに止まらぬ 笹舟にのせるマシュマロ傾いてゆく
鉄人間 鉄腕 鉄足働いていつか便利に溶け込んでいる

はるちゃんと呼びて親しみしが戦後すぐ上荷で朝鮮に帰つていった
はるちゃんのその後は知らず私より少し年上だったと思う
その当時少女だった私の目に焼きついているはるちゃんとの別れ
くの字に曲った奥また所に彼のはるちゃんは住みていし
一つの水道に寄り白衣をたたき洗いしていた朝鮮のひと
小学校のクラスの中に何人かいた朝鮮の彼の友だち
今おもえは随分さびしい思いをしたであろうわたしのはるちゃん